

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻65号 平成21年4月1日発行

「修身教授録」探求（第三十一回）

十六 女子の使命

森 信 三

すべて人間と言うものは、自己の運命を自覚する処から初めて真に出発すると申してもよいでしょう。かくして私どもは、将来自分の通らねばならぬ道筋が大体如何なるものであるかをいう事に就いては、予め明かに承知している事が極めて大切であると思うのです。今あなた方にしても勿論細かい事柄は人によってそれぞれ違うでありましょうが、しかし女子としての運命という上からは、大体通らねばならぬ道筋があると思うのです。そこでこの女子として将来通らねばならぬ道筋が、大体如何なるものであるかという事を予め知っていると否とでは、或る意味ではあなた方の生涯を岐つともいえるであります。第一女子としての自己の運命を自覚すると否とでは、現在のあなた方の心構えがすっかり違ってくるであります。又斯様な心構えの相違によって、あなた方の日々の生活そのものも根本から違ってくることであります。同時に此の日々の生活の相違が、やがて又あなた方の前途を大きく二つに岐けて行く訳であります。

そもそも私どもの生活に於ては、実は日々刻々が目に見えない追分けであり岐れ路なのであります。遠足でも途中に飲水なし

と最初から分つて居れば予め水筒の用意も致しますが、そうと知らなければ用意の仕様もないわけであります。有限なる人間には、一々の細かい事柄の見通しはもとより出来ませんが、同時にこれだけは先づ動かないという大きい見通しだけは、卓れた人ほど早くからつけるものであります。実際前途の目標が見えねば、一步の踏出しにも真の自信がないわけです。これあなた方がこの二度とない人生に於て生をこの皇国に享けた以上、特に女性として生れたからには、真に意義ある生涯を生きんが為めに、何よりも先づ女子の運命について予め心得ておく必要ありと思う所以であります。

さてそれでは女子の運命とはそもそも如何なるものでありましょうか。即ち婦人の大部分が今日まで通つて来、又如何に時は流れても、又社会の様子は如何ように変わるとも、これ丈はどうしても変らぬというものは何かと申せば、やはり結婚して人の妻となり、更に母となつて子供を生み育てるといふ事でありましょう。而してこの婦人の運命への真の関門はと申せば、やはり嫁入りといふ事でありましょう。ここに結婚といふ言葉を避けて特に「嫁入り」と申しましたのは、私には結婚と申しますとどこかに男女同資格で寄り集まって一家を成すという感じがするからです。即ち二つに割られたリングを合せるかのような誤解があるかと思われからです。或はうっかり

すると、あなたの方の中にも結婚という事を大体その様に考えている人がないとも限りません。

ところが真実の結婚というものは決して左様なものではなくて、まさに夫の家へ、「嫁入る」事であり、即ちわが生家との縁をすつかり断ち切つて、先方の家族の一員に成りきる事であります。その証拠に第一結婚すれば生家から籍を除かれて先方の姓に変わることでも分りましょう。そもそも生家の籍から除かれるという事は、生家に於て死ぬるといふ事であります。実際戸籍は死なない限り抜けられないものであります。かくして結婚といふことはおのれが生家に於て一度死ぬると同時に、先方の家族の一員として改めて生れ甦るといふことであります。そこで如何に我の強い婦人でありまして、本当に結婚したいとあれば、生家の姓を捨てて先方の籍に入りその姓を名告る他ない訳であります。もしそれがどうしても嫌とあれば、永遠に所謂内縁の夫婦の域を脱する事が出来ない訳です。

そこで結婚という事は、肉体以外に於ては一度自分のすべてが死んで、然る後新に先方の家に生れ更るといふ事であります。それ故結婚の翌日から、我が家といえは婚家先の事であつて、生家の事ではなくなる訳です。同時にこれまで「内では」と言うていた生家の事は、里と呼ばなければならなくなりません。否この「里」と言う言葉す

ら余り口にすべきではないでしょう。かく申せばあなた方は結婚というものは何と窮屈なものかと思われなくてもありましようが、しかしこの事は一度あなた方が自分の息子に嫁を貰う立ち場になつてみれば直ちに分ることでありましよう。息子のお嫁さんが、さあと言えは「里では里では」と連発する様では誰しも困つたものと思つて違ひありません。尚序に申せば、もとより当然のことでありますが、紋なども結婚と同時にすべて先方のものを用いなければならぬわけです。処が近頃の若い婦人の中には、結婚後相当の年月が経つてもまだ生家の紋に未練を残している様な奥さんも時々あるようであります。左様な婦人は片足は婚家先の敷居の内に入つていても、後の片足はまだ生家に残している人です。実際主人と並んで居る時、二人の紋が違つていれば外から何と見られるかと言ふ事さえ気付かないほどの愚さです。長男が学校へ行く年配になつていながら、なおかつかくの如くであつては、かかる家庭の内輪の程も察するに余りあるといふものでしょう。

そこで女の子の教育は親なり教師なりの愛が深ければ深いだけ、厳しく十分な躰けをしておかねばならぬ事が分るでしょう。即ち女は将来他家の人になるという事がその必然なる運命である以上、他日如何なる家へ嫁ごうとも恥をかかぬ様、又その為にな辛い思いをさせないだけにしておかねばな

らぬでありましよう。即ち将来自分の眼の及ばぬ所、手のとどこかない所で苦しませ悲しませる事となるべく少い様にさせてやりたいというものが、我が子に対する真の慈愛というものでありましよう。それ故真の慈愛というものは、勿論酷即ちむごくはないけれども、厳即ちきびしいものであるはずです。然らばこの酷と厳との差は如何なる点にあるかと申せば、結局根本に於て相手の将来を見通す明の有る無しといつてよいでしょう。そこで子供の躰けは男女ともに大切である事もより申すまでもありませんが、特に女の子に対してはその躰けを厳しくしなければならぬ所以がお分りでしょう。同時に又あなた方のような女子の生徒も同じことです。即ち女は将来如何なる家風の家に入つてその一員とならねばならぬか、何人も予めこれを測り知る事の出来ない処に婦人特有の運命があるわけですから、そこで将来如何なる家風の家にならねばならずと安んじ得るまでに教育しておくことが女子教育の根本を為すといふべきであります。

そもそもあなた方位の年頃になれば、もう斯様な女子としての自分の運命がぼつぼつ分り出さねばならぬはずであります。即ちあなた方位の年頃になれば、そう何時までも我が家で甘えてはいられない自己の運命に気付き出さねばならぬはずですから、恐らくあなた方のうち大部分の方は、ここ五、

七年も過ぎればこの女子特有の運命にぶつかることでありましょう。すなわちいやでも応でも、父母の膝下を離れて全然未知の家風の中に入らねばならぬ。しかもそれは旅行などのように単に一時的のものではなく、一度行つたが最後生涯帰つては来られない道であります。事実又中途で帰つてこられたらそれこそ大変です。即ち女の結婚は一度父母の膝下を離れて先方へ嫁いだら、再び帰れぬという処に悲劇的といえれば悲劇的ともいふべき女子特有の運命がある訳であります。そこであなた方にして、もしも多少でもこの辺の事柄が分りかけたならば、これ迄の様な無自覚な生活態度をその儘持続することは出来なくなるはずです。即ち一々他人からかれこれ言はれずとも、自覚的に我が身の処置をして行ける様になるはずです。あなた方の小学校時代に同級だった人々のうちには、もうぼつぼつ結婚しかけている人もないではないでしょう。斯様に自分の嘗ての友達が結婚しかける年配に達しながら、何時までも甘えてばかりいるようでは全く困りものでありません。

そもそも甘えるということとは、心にもたれかかるといふことであつて、つまりは自ら立ち得ない何よりの証拠といふべきです。この事は例えば子供の躰けの上にも言えることでありまして、子供が柱とか壁とかにもたれかかる癖を直さないと、そうい

う子供はいつ迄も父母に甘えもたれかかつて眞の自立の出来ないものであります。「かくして両親に甘える」ということは、之を突きつめれば実は人生そのものに対して甘えているということであり、人生に対して甘えているということとは、畢竟人生に対して盲目ということでもあります。かくして眞の学問修養は、何よりも先づ此の心の根本の甘えを除き去つて、人生の如実の相を見ることとなくてはなりません。人生の如実の相の分る時、我が将来歩まねばならぬ道はおのずから見えてくるはずであります。即ち之れを端的に申せば、現在のあなた方としては女子としての自分の運命を自覚して、もうそう永くは生家に居られぬ我が身であるということを感じることが第一です。あなた方の一切の修養はまさにこの脚下照顧の一大事より出発すると申してよいであります。

（修身教授録 第四巻周志同行社昭和15年刊）

森信三先生の短文紹介

論文 国家新生の原理

第三回

森信三

3

ではファイフテが、この書に述べている事柄はいかなる点において我々の国家再建の原理たり得ないであろうか。我々はこの点を明らかにすることによつていわば側面から日本国家再建の原理を明らかにすることができよう。

その第一は、なるほどファイフテは、先にも一言したように、この書の開巻劈頭、自国敗戦の原因をその著しき道徳的頼廢にありとして置いている。この自省の態度については、我々は全く賛同を惜しまぬものといつてよい。然るにファイフテのこの書における論述はその後も、この自省を持つて貫かれていくかというに、遺憾ながら私はかく言い得ないものを見るのである。否、ファイフテのかかる反省は、開巻間なくして終わつて、その後の彼の論述は自民族の素質的優秀性とならびにこれが開発の方法としての新教育の説明にその大部分が費やされていくといつてよい。もちろんこのことは普通の常識的立場からは是認されても良いことである。しかも今日われわれの置かれてある境位はそうした常識的態度を以てしては到底如何とも為し得ない種類のものではあつて、今日日本国家の再建について思いをいたす者はかくの如き我々自身の置かれてある境位の絶対的特異性に対する根本認識をその予備条件とするのであつて、先に吾人がたとえファイフテのこの書がいかに卓越せる古典的名著であるとしても、これをそのまま吾れらの国家再建の原理とは為し得ないと言つたゆえんである。

すなわちファイフテがあつた当時のドイツはあの程度の反省を以てしても尚よく国家を再建し得たのであるが、今日この絶対的境位に置かれて置いている日本は、ファイフテがこの書において述べている程度の反

省：いわば相対的反省を以てしたのでは国家の再建は絶対に不可能というの外ないであろう。即ち先にも述べたようにフィフテはあの講演の最初において、少しく自民族の道徳的頑廃について述べてはいるが、その大部分は、自己の民族すなわちドイツ民族の素質的優秀性を力説し、これに新たな教育を施せば国家の再建期して待つべしという論調である。

然るに私には、日本の再建は到底その程度の生易しい態度でできるものとは思われない。私は日本の再建はそうした一方では反省し否定しつつ、他方では肯定しているというような相対的な態度では絶対に不可能と思うのである。もちろん我々の民族に何らかの意味で誇るにたるべき素質がないとは決して思わない。しかも私は少なくとも現在ではそうした自己肯定的な言説を為すことは、日本の再建のために有害ではあっても決して貢献する所以ではないと思うのである。思うに今日われわれ日本民族は伝統的な行事に関しては、それが禁止せられていない限り、あくまで持続継承しなければならぬ。そのためには我々日本人特に教育関係者は大なる勇気を要すると思うのである。しかし無形の観念的な事柄については、我々はその唯一主体である皇室に対する敬愛の情念を外にしては、伝統的なものに対して一応、全否定を与えてよいのではあるまいか。そうしてかかる徹底的全否定の「楔」のみがよく民族生命の凝固を

救うのであろう。有形的行事の存続継承を必要とするのは有形界のことは、一旦の断絶は永遠の断絶となるが故であり、無形の執念界の否定は否定するもの自身が吾なるがゆえに、いかに徹底的否定をしたつもりでも、その否定は否定の当体としてのわれ自身における生命の連続がある。否意識界のことは否定によつて却つていのちの連続は新たな生彩を放つて強化せられるのを常とする。すなわち根本的否定が眞の襖ぎとなるのである。

（「開頭」創刊号昭和22年3月号）

あとがき

皇室を敬愛するを除き他の無形の観念的なものは全否定してかからねば、国家再建はその端緒たり得ないと森信三先生は断じておられる。愚生はこの辺のことが不勉強でよく分からない。がどうやら形のあるものもないものも何でもかんでも否定し切つて今日の精神的頹廃を呼びこんでしまったきらいがありそうだ。戦後64年を経てようやく澎湃として形のある伝統文化の復興と継承とが喧伝されるに到っている。小生は日本の伝統的精神風土の復興も欠かせないと考えている。このことは、この敗戦当時の全否定が行われたとして、ようやくその反動が始まったと理解していいのだろうか。

WBCで日本が二連覇。昨年ノobel賞に続いて日本の名が世界に轟いた。しか

し政治経済政策はコップの嵐に汲々として、世界からは3流国の名が定着している感だ。何とも歯がゆい限りである。ソマリア沖へ出向いた自衛隊が他国軍同様、本来の軍の機能を行使し、日本ここにありとの手柄を期待したい。が、法の裏付けは不十分。どうして超党派で国益を護ることに腐心できないか。国外の宇宙では若田さんが先進的な仕事を着々と果たされつつあるのは嬉しいことだ。（二繁）

T 63310003

桜井市朝倉台東二丁目五三二八一九

臂 繁 一 一 発行

TEL・FAX 074414513422

http://web1.kcn.jp/syushin/

「かよう会」のご案内

日時 平成21年4月17日(火) 18時30分～(毎月第三火曜日原則)

場所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』 「電話」(四ツ橋ビル 管理事務所) 06-6531-3686

交通 地下鉄：四ツ橋線四ツ橋駅下車2番出口へ。歩30秒 「長堀鶴見緑線線」並びに「御堂筋線」心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との連絡口で直結。

テキスト 森 信三著「修身教授録」(致知出版) 2300円 (大きな書店で購入) 4/21 ペスタロッター 5/26 批置き土産 6/23 わかれの言葉

参加費 1000円

